

中国の園林における借景の意味と「風景窓」の役割

李

桓*

A Study on “Chinese Landscape Windows” which Blend with the Surroundings

Li Huan

1. はじめに

風景の問題は豊かな人間環境を築いていく上で重要な課題である。

風景は、外部にある現実が人間との相互関係一特に視覚的な関係一において成り立つもので、そのあり様は人間の見方と大きく関係する。風景の計画は、「眺められる対象」と「対象を眺める方法」(視点と見方)の両方が重要である。

中国では、見方を巧妙に操作して風景を多様に楽しむようなことが特に園林の世界に見られる。「園林(ユアン リン)」は中国で用いられている言葉で、庭園の意味である。園林における風景づくりの重要手段の一つは、多様な開口部を設けることである。風景を枠に嵌めるように、開口部を介して風景を楽しむのである。開口部は、窓や門だけではなく、例えば両柱と軒と欄干との間に限定された部分などを含めて様々にある。筆者は風景を意識して設けられた様々な開口部のことを総じて「風景窓」と名づける。

「風景窓」という手段は中国の園林における風景づくりの理念と無関係ではない。園林は、「借」を風景づくりの根本的な手段とし、風景を「つくる」というよりも、様々な要素を「借り入れて」風景とするのである。そこで、「風景窓」は大きな役割を果たしている。

現在の造園学においては、「借景」は一般に「借景庭園」が意味するように、「園外景観」(例えば山や塔など)への眺望形式をさす。それは限定された「借景」として問題がないが、それだけでは、中国の歴史書に書かれた「借景」の意味を理解しにくい。そこで、中国の園林における「借景」の本来の理解を明らかにする必要がある。

本研究は中国の園林における借景の意味を検討し、借景と「風景窓」との関係性を明らかにしたい。研究方法は中国の造園の歴史における重要な書物である『園冶』⁽¹⁾と『閑情偶寄』⁽²⁾を考察する。

本研究の意義は、中国の造園への理解を深めることであり、風景の計画における新たな知見の獲得につながることである。

2. 『園冶』と『閑情偶寄』について

中国の造園は、歴史が古く、量的にも膨大であるが、その分野における技術専門書は極めてまれである。『園冶』は、造園に関して専門的に扱った唯一の書物と見なされている。『園冶』のような専門性の高い書物のほかに、例えば文化人による「游記」(旅行記)や筆記や散文、あるいは美術家による「画譜」や絵画分野の理論書など、造園と関係の深い書物が多数に見られる。『閑情偶寄』は後者にあたる書物である。

上の2編のほかに、例えば『長物志』や『揚州

* 人間環境学部 環境文化学科 助教授
2002年12月2日受付

画舫録』など、造園関係の重要な書物もある。しかし、本研究で取り上げた『園冶』と『閑情偶寄』は、「借景」や「門・窓」に関する記述が多くあり、本考察にとって適切である。

明代の画家兼造園家である計成による『園冶』(1634年頃刊行)は3巻で構成される。第1巻は「興造論」,「園説」,「相地」,「立基」,「屋宇」,「装折」,第2巻は「欄杆」,第3巻は「門窓」,「墻垣」,「舗地」,「掇山」,「選石」,「借景」というような内容である。うち、「興造論」と「園説」は造園全般に関するもので、造園の基本理念を述べたものである。その他の各章節は造園の諸分野についての個別的な論説である。本研究と関係の深いものは「興造論」,「園説」,「門窓」と「借景」の諸節である。

明末清初の劇作家・小説家であり、造園家でもある李漁による『閑情偶寄』(1670年代頃刊行)は、「曲部」,「演習部」,「声容部」,「居室部」,「器玩部」,「飲饌部」,「種植部」,「頤養部」という八つの部分が含まれる。演劇から養生までの幅広い内容を扱ったもので、うちの「居室部」は家屋の建造や造園などに関するものである。「居室部」の中に、「取景在借」(「風景を取り入れるには借りることにある」という意味)を題名とした一節は、借景と窓との関係を見事に述べている。

3. 中国における「借景」の広義性

『園冶』は「興造論」の節において、「地形に従い、借景をすることは巧みである(「巧於因借」)」という基本思想を明らかにしている。「借景」の節においても、「借景」は造園の要であることを強調している。『閑情偶寄』は「取景在借」という題名が示すように、風景づくりの手段は借景にあると結論づけている。借景は中国の造園の基本的な手段であり、それをにおいてほかにない方法でもある。

なぜ借景はそんなに重要とされているのか。それは中国側で理解されている借景の意味に大きく関係する。

中国における「借景」の概念は、現在の造園学

において一般にいわれているような借景、つまり「園外景観」(特に山や塔などの遠景)を庭園から眺めるといのはいうまでもないが、それだけに限らない。例えば、『園冶』の「借景」節では、「遠借」,「隣借」,「仰借」,「俯借」,「因時而借」が言及されている。上の「園外景観」を眺めるようなケースは『園冶』のいう借景の一つである「遠借」の概念にあたる。この種類の借景は、最初の「興造論」と「園説」の節で、例えば「遠い山は借景によろしい」(「遠峰偏宜借景」)と一般的に触れている。



写真-1 拙政園における遠借

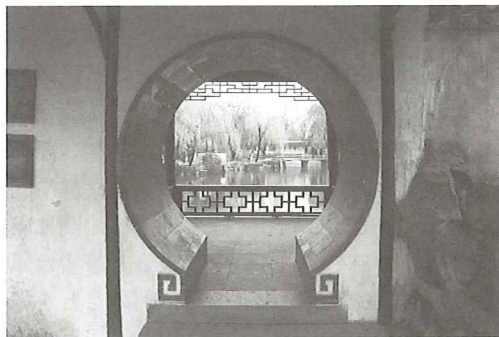


写真-2 拙政園における隣借

「遠借」の代表的な事例として、例えば無錫寄暢園における錫山と龍光塔の借景や、蘇州拙政園における北寺塔の借景(写真-1)などが挙げられる。

他のケースとしては例えば、複数の小さな庭で構成されている大きい庭園において、一つの小庭がとなりの他の庭から風景を借用する場合である。

このような「借景」は、『園冶』のいう「隣借」の概念にあたる。写真-2は「隣借」の事例である。ほかに、例えば家屋の近くにある一本の花や一塊の石、あるいは楼閣の一角などのような借景もある。このような借景に関する記述は『園冶』の中でいたるところに見られる。

『園冶』の「借景」の節ではまた、春の燕の姿、夏の鶯の歌、秋の虫の鳴き声、冬の枯葉の音、などの借景の例を挙げている。季節や瞬間的な出来事からみると、そこには「因時而借」（時に応じる借景の意）の概念が当てはまるが、目に見えないもの（鳴き声など）も借景の要素となっている。

上のように、中国の園林における「借景」の意味は、広義的な部分が含まれることがわかる。庭の外にある「遠景」を園内に取り入れるようなことはいうまでもないが、庭の中にある様々な要素を取り入れることも含まれる。そこで、ある既成の風景を眺めるようなことよりも、要素を取り入れるのに怠らず、様々なもの、特に、人為的につくれないもの、土地と時間に属するようなものを積極的に利用し、風景として組織することが「借」の本義となる。要素を取り入れ、そして、風景へ形成していくというような過程も「借景」の概念として読み取られる。

4. 『園冶』の「門」・「窓」についての考え方

「門窓」の節では、門や窓の造形や工法だけではなく、それらと風景との関係について述べられている。門や窓の基本は、オープンであること（「門窓磨空」といわれ、その設置においては、風景に絡んで奇抜な効果を求め、情念を感じられ風致であること（「触景生寄、含情多致」）、俗なものを避け良い風景を取り入れること（「佳境宜取、俗塵安到」といわれている。門や窓から眺められる風景について、例えば薄いカーテンを隔てて見えてくる青くてきれいな川のめぐり（「輕紗環碧」）、若い柳の枝の間に望む青い山（「弱柳窺青」）、聳える巨石（「偉石迎人」）、風に揺られて影をつくる細い竹（「修篁弄影」）などの例が挙げられている。

このように、門や窓から風景を求め、効果的に楽しむようなことが、非常に重視されていることがわかる。

『園冶』は門や窓のスタイルについて、計31種類を挙げている（図表-1）。これらは非常に代表的な様式で、例えば蘇州園林の中でも、一般的に見ることができる。

このような形の異なった風景窓を通して眺められる風景は、異なる効果が得られると考えられる。

5. 『閑情偶寄』における「窓」と「借景」

『閑情偶寄』は「居室部」の「取景在借」の節において、窓を通した風景の楽しみ方、および窓と風景との本質的な関係について述べている。そこで、次のような窓が興味深く紹介されている。


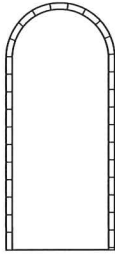
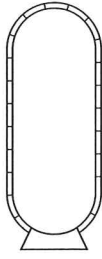



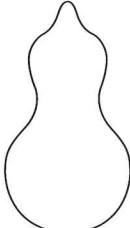
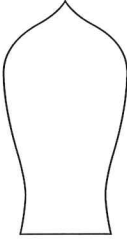
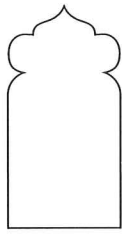


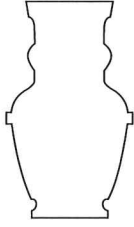

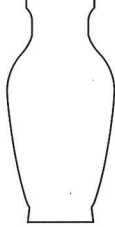

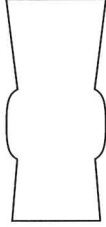
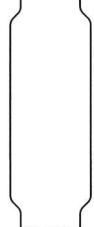
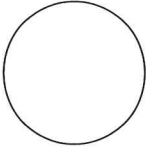
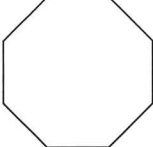
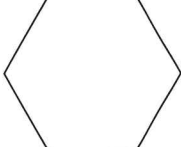

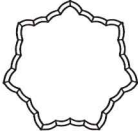
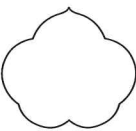
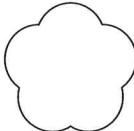
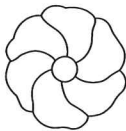
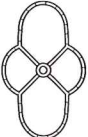



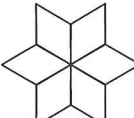
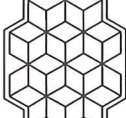
(1) 便面窓

「便面」とは扇子や扇状のものをさす。「便面」という名前の由来は、人が他人に自分の顔を見せたくないときに、扇子を使って顔を遮っていたことから来たようである⁶⁾。「便」とは便利の意味で、「面」とは顔の意味である。ここでいう「便面窓」は扇型の窓をさしている。

『閑情偶寄』はこの窓について、西湖に浮かぶ船の船室の両側を最もよい設置場所としている（図-1）。人が船の中に坐ってみると、常々と変化する風景が現れる。湖や山の景色（「湖光山色」）、社寺建築（「寺観浮屠」）、雲煙や木々（「雲煙竹樹」）、きこりや牧人（「樵人牧豎」）、醉漢や遊女（「醉翁遊女」）など、様々な風景がすべて「便面」の中に入り、まるで天然の絵図のようである。その上、無限のシーンが楽しめるという。

さらに、この窓は、ただ自ら楽しむのみならず、他人にも楽しんでもらえるという。船室の中の人物や家具などは、また一種の風景を構成するからである。例えば遊女や僧侶が（船主に）呼ばれたときの場面（「拉妓遊僧」）、船主が友人を招いたときの場面（「呼朋聚友」）、棋碁の対戦や絵の鑑賞をしているときの場面（「彈棋觀画」）、詩文を書いて

図表一 『園冶』における門と窓の31式

<p>以下は門</p>	 <p>方門合角式</p>	 <p>圈門式</p>	 <p>上下圈式</p>	 <p>入角式</p>	 <p>長八方式</p>
 <p>執圭式</p>	 <p>葫蘆式</p>	 <p>蓮瓣式</p>	 <p>如意式</p>	 <p>貝葉式</p>	 <p>劍環式</p>
 <p>漢瓶式</p>	 <p>漢瓶式</p>	 <p>漢瓶式</p>	 <p>漢瓶式</p>	 <p>蒼草瓶式</p>	 <p>花瓶式</p>
 <p>月窓式 (門あるいは窓)</p>		 <p>八方式 (門あるいは窓)</p>		 <p>六方式 (門あるいは窓)</p>	
<p>以下は窓</p>	 <p>片月式</p>	 <p>菱花式</p>	 <p>如意式</p>	 <p>梅花式</p>	 <p>葵花式</p>
 <p>海棠式</p>	 <p>鶴子式</p>	 <p>貝葉式</p>	 <p>六方嵌榫子式</p>	 <p>梔子花式</p>	 <p>罐式</p>

いるときの場面（「分韻拈毫」）などがある。それらを外から見ると、まるで扇子に描かれた人物画（「扇頭人物」）のようだという。

便面窓が家屋において設置される場合は、外壁の窓の下側に窓台をつけるようにすすめられている。その窓台に盆栽などを置くと、また、様々な特徴ある風景が得られるという。例えばランを置くと、「便面幽蘭」（図一2）が、菊を置くと、「扇頭佳菊」が得られるのである。



図一1 西湖と便面窓のある船
 (出典：『一家言居室器玩部・工段营造録』
 上海科学技术出版社1984年)



図一2 便面幽蘭
 (出典：李漁『閑情偶寄』作家出版社1995年)

味である。「無心画」とは文字どおり、中心部のない絵のことである。「尺幅窓」も「無心画」も同じく、掛け軸の窓（窓は中空であるので、本来なら掛け軸になりえない）のことであり、別の言い方でいうと、中心部のない掛け軸（掛け軸は絵が台紙の真中に表装されるので、中心部のない掛け軸は本来ならありえない）のことである。いずれも「絵」か、「窓」という2つのもの間で意味が揺れている。面白い造語である。



図一3 尺幅窓
 (出典：李漁『閑情偶寄』作家出版社1995年)



図一4 尺幅窓に絵入りの扉で閉める
 (出典：李漁『閑情偶寄』作家出版社1995年)

(2) 尺幅窓または無心画

「尺幅」とは布や絵などの寸法のことをさすが、絵（特に山水画）の代用語としても使われる。ここでいう「尺幅窓」はつまり、「山水画の窓」の意

『閑情偶寄』の著者である李漁は山水のよい場所で別荘を建てているとき、住宅が面している山に魅せられ、それを壁で遮ることを惜しみ、ぜひ絵のように家に取り入れたいという望みから、この

窓を考えついた。結果として、この「尺幅窓」は図-3のように実現した。「尺幅窓」から外側の山を望む効果について、著者はこのように述べている。「じっと眺めると、窓は窓ではなく絵となり、山はまた別荘の後ろにあるあの山ではなく絵の中の山となる」と。ただし、あまり窓に近寄りすぎると、このような効果が得られないという反省点も書かれている。

尺幅窓を閉める場合、扉に名画を表装するようにすすめられている。そうすれば、「無心画」はまた本当の絵に変わる(図-4)。

ガラスが普及するようになった清代以降の園林、特に気候がより寒冷な北方の園林(例えば北京の頤和園など)において、ガラスに絵が書かれるケースが多く見られる。このような絵入りの手法は李漁の「尺幅窓」あるいは「無心画」の中の発明と無関係ではないと考えられる。

(3) 梅窓



図-5 梅窓

(出典：『一家言居室玩部・工段营造録』
上海科学技術出版社1984年)

梅窓は、ザクロやダイダイなどの枯れ木を利用して、枝の自然な姿を生かして、窓枠に梅の姿をつくり出した窓である(図-5)。梅の花は紙などを用いてつくる。

以上(1)~(3)に挙げた窓は、『閑情偶寄』に紹介された3種類の窓である。窓の役割については、次のように指摘がある。「ものも同じもので、ことも同じことであるが、窓はないとき、これらはただの物事としか見えず、窓(枠)が付くと、これら

は絵として見えてしまうのである」と。これは風景と窓との関係についての指摘であり、借景における窓の重要性を強調したものである。

このように、「借景」の楽しみ方について、じっと止まって見るのみならず、船に乗って移動しながら風景を楽しむことが考えられている。また、借景の方法について、窓を通して「事物」を「絵」(風景)に変えることが考えられている。風景と絵が互換できるように実践されている。

6. 結 び

以上の考察で、中国の園林における「借景」の意味および借景の実現における「風景窓」の役割が明らかにされた。中国における借景の概念には広義的な側面、つまり、自他や遠近に限らず、また、見えるものか否かに限らず(例えば季節や音など)、すべて「借」の対象に含まれている。そこで、外界にある様々な要素を、ある手段を通して集約(あるいは選定)し、風景へ置き換えていくことが「借景」の実現にとって重要となる。本考察では、窓や門のような開口部、つまり「風景窓」がこの実現に重要な役割を果たしていることがわかった。人間と事物との間には、ある種の「窓」の介在によって意味が生じ、風景が形成する。これは中国で早くから認識・応用されていたのである。

本考察は、文献研究に重点を置いた。今後、個々の事例において、さらに考察を深めたい。また、日本庭園との違いも注目したい。

注及び参考文献

- (1) 計成著、陳植注訳『園冶注釈』中国建築工業出版社1988
- (2) 李漁著『閑情偶寄』作家出版社1995
- (3) 周維權著『中国古典園林史』清華大学出版社1990, pp167
- (4) 陳從周編『中国園林鑑賞辞典』華東師範大学出版社2001, pp1015
- (5) 辞源修訂組、商務印書館編集部編『辞源』商務印書館1995, pp116